WASON
Apr. 189
no. 314

女學雜誌

第三百十四號
明治二十五年四月廿三日發兌

十日の大火

日本外史（迎春行）

芭蕉翁（透谷）

天氣と雲

下六番町六番地
女學雜誌社

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

雜 女 誌 學

The Woman's Magazine.

(JOGAKU ZASSHI.)

No. 314.　APRIL 23rd.　1892.

第三百十四號目次

EDITORIAL:—In Pursuit of Spring. (No. 5.)

MISCELLANEOUS:—Reading Bashō at Matsushima. A Midnight Prayer.

LITERARY:—Insect-music.

SCIENTIFIC:—Weather and Cloud.

THOUGHTS AND FANCIES:—The Great Fire on the 10th. Military Spirit.

CRITICAL NOTES:—

CONTRIBUTED ARTICLES:—

ORPHAN'S FRIEND:—

CONCERNING WOMEN:—

NEWS OF THE WEEK:—

●迎春行
●雜錄　松島に於て芭蕉翁を讀む(透谷)○夜半の祈(雲峰生)
●文學　百蟲譜
●理學　天氣と雲の關係(馨子)
●隨感　十日の大火(た、た)○武(山月子)
●批評　平野次郎○後の月影(透谷)
●寄書　日本と一大勢力(參東洲生)
●孤兒之友
●女報　さまゞゝ
●物價

『女學生』大に變化一進して小學女生諸君の上にも友たらんとす

一　春風吹き來りて百花爛熳たらんとするの候、女學生大に千紫万紅の裝ひを一進せずんばあらず、

一　同盟せる高等女學校の秀才、筆大に熟して一層小學女生の上にも博く友たらんとす、

一　故に面白き趣向をも加えたり、即ち、野邊の遊び、博物の園、秘藏箱、文學、時事、家の友、理科の話し、詩歌の卷、古文庫、小說、餘興等の欄を增したり、

一　別に『文の林』欄を設けて廣く小學校女生徒の文章をも揭げんとするが故此等の投書をも募るものなり、

一　代價も、追々愛讀者增加するを以て一層奮發する所あり、即ち四錢に改めたり、

一　改まりて出づる廿三號は來る廿一日を以て發兌す、

下六番町六番地
女學雜誌社
女學生發兌部

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

女學雜誌 第三百十四號 明治二十五年四月廿三日發兌

迎春行

(卅六) 靈界清話

客舍最奥の樓上いと物靜かなり、夜深けて人悉とく眠り、たゞ二人を遺す。二人とは、石井十次君と余との謂なり。此の夜廢娼演說會を終りてより、石井君を余が寓に誘なひ、細話綿々、曉四時に近し。余は、靜夜の閑話に快を覺えたると、此時に過ぐるものを記臆せず、盖し未曾有の事なり。友に種々あり、然れども靈の友に及ぶものはあらず、物語りは皆な樂し、然れども靈性上の經驗を相語らふに優るものはあらず。石井君は云ふ、今や孤兒院の事業は殆んど滿天下の贊成を得たり、事業の事に付て嘗て苦慮せしことはあらず、たゞ靈魂の事に拘はりては、時に失望の念ひなき能はず、滿天下を得るとも若し生命を失なはゞ何の益なきことを深く知りぬと、余は悉しがたき辭ばを以て之に同情を表しぬ。余は、我國の孤兒の爲めに小橋君及び石井君あることを深く感謝す、而して、兩君あるは、之に多數無名の助力者あるによる。就中、石井君は言へり、余の如きは看牌に過ぎず、住谷小米女史あるにより、生き且つ動く、余の働らきは皆な彼女の勸めによると。故に、余は亦た此女史あることと、他の三四の助力者あることとを感謝す。而して、此類獻身者あるは、啻に孤兒の爲のみの救ひにはあらず。

(卅七) 岡山孤兒院

岡山孤兒院には、目下、百五十九人の孤兒あり、内五十八人を女兒とす、女兒の最長者は、十五歳、十二歳、十一歳あり。男兒の最長者は十七歳なり。仕事は現今六種。麥藁編みを最初の豫備門とし、之を經て而して後ち他に移らしむ。米つき部、活版部、竹のすだれ部、百姓部、散髪部あり。近日將に大工學校及びマッチ製造部を起さんとす。麥藁編みの部には、百十數の孤兒、列を整えて段々に坐し、一日八時間從事す、各組に於て、巧拙遲速により編上げに長短あり、即はち、七丈四尺より二丈二尺、四丈四尺より一丈二尺、六丈二尺より二丈五尺(藁の太き細きにより組を分つ)の差あり。活版部には、十八の孤兒、或は字母によりて新字を製し、或は報告

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

書様のものを組立つ。米つき部には、一日に四人づゝ、四組あり。散髪部には、鬚そりを一錢、斷髪を二錢として、日に三十五錢乃至十五錢程の收入あり。其外、院の人惣躰の爲に髪を整ふ。石井君云く、初は預約寄附に依り、中ごろに不定寄附に依り、今や從業自活の途に入らんとす、追々事業を擴張し、其利潤により孤兒をして自活せしめん、而して其の收入は公平に割り、所云る管理者が多く貪ぼるの通弊を改ため、社會的勞働問題の一策を實施して、經濟學者の多く難しとする一點に試みる所ろあらんとを望む。而して今は事業自活の第一着手として、院内の菜代は悉とく此の事業の收入にて辨ず、もし足らざる時は鹽を嘗めて耐ゆるの覺悟なりと。炊事は、石井君の夫人及び孤兒二人にて辨ず、食物は、役者悉とく孤兒と同様にて、且つ孤兒と席を同うして食ふ。一夕、石井君に招かれて、其晩餐に與かる、もとより珍味あるに非ず、然れども、余は、天下義人の芳志によりて集まりたる金と、孤兒が辛苦勞働によりて辛うじて收入したる金とを以て買はれたる、米及び菜が、石井君夫人、並びに孤兒二人が、寒氷に手を沒して調理せられたるものを食ふとして、感激に堪へず、肅然祈禱感謝して之を受けたり。

(卅八)孤兒院祈禱會

毎夜七時より七時半に至る、院に於て報告及祈禱の集會あり。終つて、九時半に至る二時間、讀書算筆の授業ありと云ふ。余、一夜此の會に臨む。舊寺院の本堂尤とも廣き所ろを會場に用ゆ。晝間の麥藁細工一まとめにして欄に擧られたるを見る。總ての孤兒列を正して坐す、惣ての役者此方の粗末なる腰掛に踞る。中央に机一脚を置え、上に花瓶を置いて花を挿はさむ、孤兒院内花の咲ふを見る、味極めて深し。机上大ひなる聖經一巻を安んず。時來れば、孤兒中のやゝ長じたる某會を主どる。傍に坐しつる、孤兒喇叭手一人立つて朗々として高らかに吹く、音滿堂に響き、勇ましく嚴かなり。續いで衆一聲に賛美歌を歌ふ。主會者則はち立つて、其撰びたる聖經中の一節を朗讀し、且つ祈禱す。其の后ち、諸員の報告あり。醫師は、病人の數、幹事は、今日寄附金の額、敎師は、今日某部の仕事の結果を報ず。續いで各部の長(伍長又は十長なるべし)たる孤兒かはる〳〵立つて、其部一日の仕事を報告す。今日は基督敎新聞の附錄千五百枚と縣廳の報告五百枚

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

を刷りました。今日は米を何斗つきました。今日は裏の草を掃除しました、夫れから何處やらを片付けました此類の報告、五つ、六つ、其都度皆な禮答す。畢りて、石井君、極めて、莊重なる語調をもて一言、余を紹介せらる。余は、此會の光景を觀、初より胸滿ち、感切まる、則はち立つて言わんとし辭を出すと頗ぶる難かりき。僅かに感慨の一二を漏す、云はく、諸君は實に幸福の人なり、神に祈る前に先づ感謝すべし、諸君の如き愛育を蒙むる學生他にあるなし、諸君の居る學校の如き美なる學校他にあるなし、諸君の如く多くの父母兄弟友人を持てるものなし、諸君は天父の仁惠の生ける證據なり、諸君の實際は生ける基督敎の說敎なりと。余は謹しみて祈禱を捧げたり。畢りて、全員めぐみの歌と稱するものを朗唱す、石井君の作にして、曩に記したるとあるものなり。喇叭手二人立つて亦た高らかに吹く、蓋し對奏なり、全員悉とく立ち、歌ふ、

嗚呼同胞よ兄弟よ　決して絶望すべからす
罪の曇りに蔽はれて　肉の眼に見へざれど
我儕を無より造りたる　天つ御親はとこしゑに
限り盡きせぬ愛をもて　汝さへ捨てずは何時迄も
めぐみの海に洗ひつゝ　千々のなやみの中よりも
限り知られぬ罪よりも　必ず救ひ給ふべし
唯信仰と祈禱とに　忍といふ字を加へつゝ
奮ひ勵みて進むべし　〳〵

(卅九)後樂園の鶴

嘗て大八洲遊記を讀むに、云く、余西游所ㇾ觀園地高松熊本爲ㇾ最、宏壯皆讓二此園一。園地假山之奇、高松爲ㇾ最、池水淸冷、游魚可數者熊本爲二第一一と。青年會の諸君、歡迎の宴を此園に開かる。庭地、園石、樹木、亭舍の趣き、言はん方なく備わる。此園、素と芳烈公の孫曹源侯の築く所ろたり。園內に、田畠あり、馬場あり、射場あり、必らずしも遊樂の爲のみにはあらずと云ふ。而して、設理一々法に合ひ、一石一木と云へども暴りに置かず、足下經路のうねりより、遠山遠見の景色に至る迄で、意を用ひずと云ふはなし。されど、余は、放養せる鶴を見て最とも深く感じたり。丹頂、白羽、首を擧げ、足を直くし、昂々平として高く步む、好く人に慣れ、近づきて去らず、潔然脫俗の風采を以て余が傍らに

立つ、余すでに半ば仙化す、一月聖人の書を讀みたらんほどの經驗を得たり。

（四十）自修鍛錬

余は到る處ろ、一言を處望せらるゝ毎に、自修鍛錬の必要を説きぬ。云く、余不肖すでに其經驗を得たりと言はず、たゞ自ら省みて足らざるとを感じ、方今吾人が要務實に自修鍛錬を強むるとにあるを悟り、則はち諸君に寸胸の微衷を訴ふるのみと。惟みるに、今の學生諸君、智と德との養成に於て双つ乍ら自修鍛錬を放却するものゝ如し、而して之を敎導する先輩諸君其人等に於て、亦た尙ほ之を度外に置くとのなきにあらず。憂事大なりとす。今の智者、連りに學者の説を援引す、カントは然か言へり、ダルヰンは然か云へり、スペンサーは然か言へりと、扨て足下自己が確信は何如に候やと聞けば、未だ定りたる量見あらずと云ふもの極めて多し。又た、今の道德家、宗敎家に於て、同樣の弱點を見る。修身の理を好く談ずれども、實際の品德に優れたるもの少なく、巧みに神學を講ずれども、未だ確乎不抜なる安心立命の地に立たざるものあり。如此き人を、大道の講釋師と云ふ、たゞ口に辨ずるのみにて、何たる効能のあらざるもの也。かゝる通弊は大率ね、智德の養成に自修鍛錬を欠くに根づく。堂々たる人類、その靈妙なる心を擧げて、藁にて製したる帋に均しくし、記臆暗誦によりては只だ人の思想を之に書き留めんとはなし、たえて其心の最上の能力を練磨するとをせず、愚も亦た太甚しからずや。余は三田派に同じて、學問は飯を食ひ着物を着、黄金を溜める爲めに効能あるのみを以て最上の目的なりとすると能はず、然れども到底學問は新らしき使用の爲に役に立つものならざる可らず、たゞ類書字引の代となり、人の思想を繰反す暗誦器械となるに至つては、文字を學びたりと言ふとを得るも、眞理を學びたりと云ふと能はず。如此く、余は亦た王陽明、アリストウトルに同じて、論理上の智識は悉皆實行し得べきものなりとなすと能はず、然れども道德宗敎の事は、必竟、人を高くし且つ清くするの力あるに至らずば、遂に効驗あるとなし。ともに此に達せんには、幾多の鍛練を要す。智德兼備の大人は、俄かに輕々しくして生じ來らざるもの也。熊澤蕃山、三年書を讀まず、思ひを潛めて心を練る、而してのち事に當れば、八面玲瓏として映して眞を得ざるもの少なし。余は、今に於て此類の學士を得んとを切に希望す。

（四十一）山林

番山、淡路島邊に行かふ雲を見て、山林の雨に關する密接の影響を觀察したり。其の好く水理を窮め、妙に灌漑の道に得たるは。必竟、山林と雲雨との關係を辨知したるによる。而して獨逸學流行の今日、堂々たる明治政府にして此の一大事を忽諸にするの實あるは何事ぞや。到る處ろに、山の禿なるを見るは言ふに及ばず、年々暴りに伐採して山林を忽ちにして躶躰にす、洪水、疫病、旱潑の害歳々に增加するもの、如し。愚民自から木を伐りて、自から此の患を招き、而してたゞ天の運を恐るゝのみ。上にありて之を見るもの、安くんぞ默するを得んや。余は、二百六十年前の番山先生に、瑣々たる追尊を呈するを止めて、速かに目下の山林荒廢を治するの策を熱望す、是れ番山先生地下に於ける眞の慶事也。

（四十二）旅中の杞憂

都を出るところ、知れる人二個病めり。一はたゞならぬ重患にて、或時は危ふきほどとなれり。余が四十日の不在中には、もはや露の命もろくも失せなんと思はれ其病床に臨みて授洗の禮を畢へたるとき、現世に於ては最早相見ることなからんと感じたり。止むことを得ず出で立ち、西京に着したる日、雪の降れるに先づ心寒ぶく覺えたるは、都なる彼の人の病何如ならんと云ふことにてありき、然るに岡山に來れるとき、彼の人が日々 温度高低、食慾增減などを一表にしたるものを寄せられ、其案外に好景氣なるを確知して、欣喜の情たとふるに物なかりき。而して、他の一人は、さして重き症にてはあらざりつれど、出で立ちしのち、言置しとほり名醫の診察を未だ受けずと聞き、切りに案ぜられて、旅中慰さめがたき情に堪へざりき。こは蓋し老婆めきたる掛念なるべし。然れども掛念は地を隔つるによりていよ〳〵增す。家外千里の異鄕にあるものは、存外事實を想ひ過ごして、餘計の心配を爲するものなり。よく此情を察するものは、或時は切要ならぬ診察治療をも受けて、旅天孤客の切なる憂ひを散ずることを爲せ。

（四十三）海邊の寺院

故ありて備后尾の道に一日を過ごす。眺望絶佳の地は、悉とく寺院なり。登りて全區を一望すれば、佛堂の所々に散在する格外に多し。之れ海邊漁者水夫の多く住居せる土地なるがゆゑ也。蓋し、漁者水夫などの多く住へる地、風あらく舟覆

がへりて非命の死を遂ぐるもの多き邊には、寺院も亦多し。海濱港灣に佛堂の多きは之が爲めなり。何人か、宗教思想を妄想なりと云ふ、死ある所ろの人は死を思はざるとを得ず、死を思ふ所ろの人は來世を思はざるとを得ず、こゝに至りて人に宗教思想なきとを求むとも得んや。宗教思想は人の天性の至眞至強なるもの也。

（四十四）佛教と邪淫

山陽出生の地、廣島に入りて、其佛教の熾んなると共に、淫猥の風驚ろくべきものあるを見たり。良夫なき乙女、その赤子を懷き、白晝公衆の前に之を負ふて恬として恥ぢず、こは我子なれども墮胎しがたきゆへに不止得育てたる也と云ふものあり。他の淫風推知するとを得べし。而して此地古來有名の佛教國なり。余はこゝに至りて、深く佛教と邪淫との關係を思ふ。見よ佛教隆盛の地は大率ね淫風亦隆盛ならずや、極めて奇怪の因果にして、實は言ひ消すとを得ざるの事實なり愛知縣下、新潟縣下の如き亦これ也。本願寺第一の金庫は、日本第一の娼妓產出地なり。娼妓と佛教と果して何のかゝはりある乎。識者猛省せずんばある可らざる也。夫れ、卑劣なる宗教は、人を卑劣にす、偶像を禮拜せしむる教儀は、多くは獸慾を惡しきとせず、時あつてか之を慫む。所云る淫祠これ也。佛教果して女子の地位を高むるに足る乎、其の婦人會、女學校を設立するに先だち、先づ邪淫を嚴禁するの取締を實行すべし。

（四十五）賴山陽

十三才の作、栗山をして舌を卷かしむ、山陽の詩才は天才なり。然れども詩を以て其本領なりと論斷するは未だ可ならず此の多感熱血の慷慨家、幕政の末、宿弊鬱結、四民昏醉せるたゞ中に卓立す。詩情を動かさゞらんとするも得んや。嘗て母に侍して芳山に櫻を觀る、阿母の一言を得るは宰相となるに勝れりと云ふ。又嘗て莊子を講じ、父の病を聞き即座に立ち晝夜兼行して遂に及ばず、之より終身莊子を講ぜずと云ふ彼は情の極めて濃やかなる大丈夫なり、至つて淚もろき偉男子なり。而も、其膝は諸侯に屈せず、身、一室に偃臥して心百世の失得に關すと云ふ、何んぞ其壯んなるや。今の人、英雄の外面を見て、其內面を窺がはず、其熱血の爲に淚の乾はけるを忘れて、彼は元と淚なしと云ふ。英雄の本色あに如

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

此く冷々たるものならんや。

（四十六）日本外史

叙事細々の點に於て誤りありと云ふヿなかれ、日本外史の本領は別に存する所ろあり。經濟粗漫、着眼未熟なりと云ふヿなかれ、新策通議の本領は亦別に存する所あるなり。實行的改革者の先導として吉田松陰なかる可らずと云はゞ、文學的改革者の破天荒として頼山陽なかる可らず、慷慨鬱勃、而して麗玄雄偉なるヿ、彼の文の如くにして、初めて文學的改革の功を奏するヿを得。方今の世上何處にか斯の活火炎々の大文章を觀るヿを得べき。余や年壯んにして倚ほ幾度びか日本外史を復讀せざるを得ず。

花をのみをしみなれたるみよしゝの
　梢にをつるありあけの月　（有家）

よしの山こぞのしをりの道かへて
　まだ見ぬかたの花をたづねん　（西行）

雜録

松島に於て芭蕉翁を讀む　透谷

余が松島に入りたるは、四月十日の夜なりき。奥の細道に記する所を見れば松尾桃青翁が松島に入りたる、明治と文化との差別こそあれ、同じく四月十日の午の刻近くなりしとなり。余が此の北奥の洞庭西湖に鞵鞋を踏入れし時は風すさび樹鳴り物凄き心地せられて仲々に外面に出でゝ島の夜景を眺むべき樣もなかりき。然れどもわれ既に扶桑衆美の勝地にあり。わが遊魂いかでか飄乎としてそゝり出で、以て靈境の美神と相通化せざるを得んや。

寢床われを吞み、睡眠われを無何有鄉に抱き去らんとす。然れ雖われは生命ある靈景と相契和しつゝあるなり。枕頭の燈火誰が爲に廣室を守るぞ。憫れむべし、燈火は客を守るべき職に忠信にして、客は臥中にあれども既に無きを知らざるなり。燈火よ客の魂は魄となりしかならざるか、飛遊して室中には留らず、女何すれぞ守るべき客ありと想ふや。明又滅。滅又明。此際燈火はわれを愚弄する者の如し。燈

火われを愚弄するか、われ燈火を愚弄するか、人生われを愚弄するか、われ人生を愚弄するか。自然われを欺くか、われ自然を欺くか。美術われを眩するか、われ美術を眩するか。韻。美。是等の者われを毒するか、われ是等の者を毒するか。詩。文。是等の者果して魔か、是等の者果して實か。

燈火再び晃々たり。われ之を惡くむ。內界の紛擾せる時に、われは寧ろ外界の諸識別を遠けて暗黑と寂寞とを迎ふるの念あり。內界に鑿入する事深くして外界の地層を沒却するは自然なり。內界は悲戀を醸すの塲なる事を知りながら、われは其悲戀に近より、其悲戀に刺されん事を樂しむ心あるを奈何せむ。手を伸べて燈を搔き消せば、今までは松の軒に佇み居たる小鬼大鬼共哄々と笑ひ興じてわが廣間を塡むる迄に入り來れり。而してわれは一々彼等を迎接せざりしかども半醒半睡の間に彼儕の相貌の梗概を認識せり。

小鬼大鬼われを圍めり。然れども彼等は悉く暴戻惡逆なる者のみにあらず。悉く兇横なる暴威を逞うする者のみならず。中にはわが枕頭に來つて幼稚なる遊戯をなしつ讙笑する者もあるなり。何となく心重くなりたれば夜具の袖を擧げて一たび拂ふに、大鬼小鬼其影を留めず消え失せぬ。少時にして瞑笑放語傍若無人なる事前の如し。餘りにうるさくなりたれば枕を蹴つて立上り、一隅の圓柱に椅つて無言するに、大小の鬼儕再び來らず。靜かに思へば鬼の形しけるは我身を纏ふ百八凡惱の現躰なりける。

靜坐稍久し無言の妙漸く熟す。暗寂の好味將に佳境に進まんとする時破笠弊衣の一老叟わが前に顯はれぬ。われ依ほ無言なり。彼も唇を結びて物言はず。

彼は無言にして我が前を過ぎぬ。暫らくして其形影を見失ひぬ。彼は無言にして來り、無言にして去れり。然はあれども彼の無言こそは我に對して絕高の雄辯なりしなれ。知る人は知らむ、桃青翁松島に遊びて句を成さずして西歸せしを。而して我を盖ひし暗の幕は我をして明らかに桃青翁を見るの便を與へたり。

怪しくも余は松島を冥想するの念よりも一句を、成さず西歸せし蕉翁の無言を讀むの樂みに耽りたり。古へより名山名水は詩客文士の至寶なり、生命なり。然れども造化の秘藏なる名山名水は往々にして韻高からず調備はらざる文士の爲に其

粹美を失却する事あるを免かれず。

飄遊は吾性なり。飄遊せざれば吾性は完からざるが如き感あり。天地粹あり、山水美あり、造化之を包みて景勝の地に於て其一端を露はすあり。詩性ある者が景勝の地に來りて神動き氣躍るは至當の理なり、然れども景勝の地は僅に造化が包裡する粹美の一端なる事を知ば、景勝其自身に對する觀念は甚だ大ならずして景勝を通じ風光を貫いて造化の秘藏に進み、其粹美を領得するは豈詩人の職にあらずや。如何にして造化の秘藏に進み、粹美を縱にする事を得む、如何にして俗韻を脫し高邁なる逸興を樂を得む。請ふ共に無言なる蕉翁に聽む。

「美」は遂に說明し盡す能はざる者なり。「美」は肉眼の睥睨ある判斷によりて凡人に誤解せらるゝと同じく雄大なる詩人哲學者をも眩惑しつゝある者なり。至妙なる繪畫能く人を妖魅す、然れども繪畫の妙工も一種の妖魅力に過ぎざるを奈何せむ。吾人眞如を捕捉すと思ふ時に眞如の燦然たる光は眞如を惑はし去る。「美」を觀るの眼も亦た斯の如し、正面に立つて「美」を觀る事は雲のかゝりたる時の外はかなはず。迷宮の中にあつて「美」の所在を爭ひ、右に走り左に馳せ、東に疲れ西に憊るゝ者比々皆な是なり。韻士は力を籠めて韻致を探り、哲學者は思ひを凝らして折解を試むるも、迷宮の迷宮たるは始めより今に至るまで大に變ることろはあらざらむ。

然れども迷宮と知つて迷宮に入るは文士の樂しむところにして、迷宮に入る事能はざるは文士の悲しむ所なり。古へより文士の勝景を探る者未だ迷宮に入らざるに、未だ妖魅を受けざるに、未だ造化の秘藏に近かざるに、先づ筆管を握つて秀句を吐かんとする者多し。造化に對して禮を失ふ者と云ふべし。彼等は彫琢したる巧句を得べし、然れども妖魅せられざる前の巧句は人工あり、安んぞ神靈に動かされたる天工の奇句を詠出する事を得んや。ひとり探景の詩文のみに就きて云ふにあらず、凡ての文章が神に入ると神に入らざるとは即ち此境にあり。古來の大作名著が神に入れるは孰れ神靈に動かさるゝを待ちて筆を握らざる者のあるべき。一たび妖魅せらるゝは蓋し後に澄清なる識別を得るの始めなるべけれ。

勝景は多少のインスピレイシヨンを何人にも與ふる者なり。故に勝景は如何なる田夫野郎をも詩氣を帶びて逍遙する者をならしむるなり。然るに所謂詩客なる者多くは勝景を以

て詩を成さゞる可からざる所を思ふ。勝景をして自然に詩を作らしめず自ら强いて詩を造らんとす。こは實に設題して歌を造る歌人の惡風と共に日東の陋習なり。彼等をして造詩家たらしむるも詩人たらしめるざもの玆に存す、彼等をして作調家たらしむるも入神詩家たらしめざる者玆に存す。而して此事ひとり景勝を咏ずる詩人に限るにあらず、人間の運命を極めんとする近代の意味に於ひての文學家が、筆に役せられて文の神を失ふも皆此理に外ならず。試に思へ當年蕉翁の俳句を作らざる可からざるは、今日の文人が文章を揑造せざる可からざるよりも甚しかりしを。況んや扶桑第一の好風に遊びて一句を作さずして歸し事如何許の恥辱にてやありけむ。然るも凡庸の作調家が爲すこと能はざる所を蕉翁は爲せり。蕉翁が余の前にひろがれる一卷の書なること是を以てなり。

われ常に謂へらく絶大の景色は文字を殺す者なりと。然るにわれ新に悟るところあり、即ち絶大の景色は獨り文字を殺すのみにあらずして「我」をも沒了する者なる事あり。絶大の景色に對する時に詞句全く盡るは即ち「我」の全部既に沒了し去れ、恍惚としてわが此にあるか、彼にあるかを知らずなり行くなり。彼は我を偸み去るなり、否、我は彼に隨ひ行くなり。玄々不識の中にわれは「我」を失ふなり。而して我も凡ての物も一に歸し、廣大なる一が凡てを占領す。無差別となり、虛無となり、摸糊として蹤跡すべからざる者となるなり。澹乎たり、廖廓たり。廣大なる一は不繫の舟の如し、誰れか能く控搏する事を得んや。こゝに至れば詩歌なく景色なく何を我、何を彼と見分る術なきなり、之を冥交と曰ひ、契合とも號るなれ。

冥交契合の長短は靈韻を享くるの多少なり。靈韻を享くるの多少は後に產出すべき詩歌の靈不靈なり。冥交契合の長き時は自ら山川草木の中に己れと同樣の生命を認め來つて一條の萬有的精神を遠暢し、唯一の裡に圓成せる眞美を認め、われ彼れが一部分か、彼れわが一部分かと疑ふ迄に風光の中に己れを籍入し得るなり。この時に當つて句を求むるも得べからず。作調家は遠く離れたり。詩人は斯る境界にあつて句なきを甘んずべし。蕉翁が松島に遊びて句なかりしは、果して余が謂むところの如くなりしが、或ひは非か。一卷余が爲には善知識なり、説の當非は暫らく措きて、余が松洲に泊せし一夜の感慨は斯くの如し。家に歸へりて奥の細道を閲するに

蕉翁は左の如く松島に於て誌せり。

ちはや振神のむかし大山ずみのなせる業にや造化の天工
いづれの人か筆をふるひ詞を盡さむ。

讃美歌一首　　雲峰生

夜半の祈　（新撰讃美歌八十二番の譜）

一　かすみをもる月　おぼろに匂ひ、
やよひのそらこそ　ふけわたりけれ。

二　こゝろにあふるゝ　わが身のおもひ、
あいの神ならで　誰にかかたらむ。

三　夜はふけまさりつ　こゝろはすみて、
しげれるおもひぞ　いとたへがたき。

四　しづけきそのにと　われたちいでゝ、
はあの下かげに　しばしいのらむ。

五　こゝろをくまなく　見たまふかみよ、
わが願ぎごとをば　きゝあげたまへ。

六　人には得云はぬ　おもひぞつらき、
わがいのる言を　かへり見たまへ。

七　あみだの谷をば　すぎこしわれも、
ふかきめぐみに　さちとはならむ。

八　いのらんおもいも　なみだにせかれ、
主をよぶほかには　ことばもいでず。

九　なやめるものをば　なぐさむる主は、
わが身のいのりを　きゝあげたまはむ。

十　おも荷のうさをば　のがれしごとく、
いのれるはてには　たのしくありぬ。

十一　花のこかげにと　つきはかたぶき、
やよひのそらこそ　ふけはたりけれ。

春候甚だ順を得ずと雖も然れども草木時を違へず、禽鳥期を知る、春月朧々として天に懸り、遠山模糊として霞中にあり、彼岸櫻將に爛開ならんとし、歸雁聲を殘して北歸す、中春の光景誠に我をして感に堪へざらしむるものあり、即ち夜半の曲を賦し、仰で月にうたひ、亦伏て皇天に祈る、パンにかへて石を與へず、魚にかへて蛇に與へ給はざるの言豈誠ならざらんや、我等信徒最上の安慰はたゞ此祈禱より來る、實に之れ我等日常の經驗なり、人或は云はん是たゞ妄信のみ、豈さる事あるべけんやと、われは云はん、若夫れ或種の人が云ふ如く全く上帝なしとするも祈禱の功なしとするも實際に於て平和を得、安慰を享くれば可なり、われは妄信なりや否やを問はざるべし、最も幸福なる道によりて世を渡らば即ち可ならずや、疑心百出、辨論盡くるなきも心安からず、思ひ平かならずば人は幸なるを得ず、

偶ま感あり、「夜半の祈」を賦す、因て附記する事然り。

四月中旬

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

文學

百蟲譜

蝶の花に飛びかひたるやさしきもの丶かぎりなるべし。それも啼音の愛なければ籠にくるしむ身ならぬこそ猶めでたけれさてこそ莊周が夢も此物には託しけめ。只蜻蛉のみこそかれにはや丶並ぶらめど、糸につながれ黐にさ丶れて童のもてあそびさなるだにくるしきを、あほうの鼻毛につながる丶さはいさ口惜き諺かな。美人の眉にたさへたる蛾さいふ虫もあるものを。

子を持てるものは其恩愛に引かれてこそ苦勞はすれ。蜂の他の虫をさりて我子さなす、老の行衛をか丶らんさにもあらず何を譲むさてかくは骨折るや。我に似よ〳〵さはいかにおのが身を思ひあがれるにかあらむ。花に狂するさは詩人の稱にして歌にはさしもよます、密をこぼして世のためさするはよし。只人目稀なる藥師堂に大きなる巣作りて掃除坊主をおびやかさんさす、それも針なくば人には惡まれしを。

蛙は古今の序にか丶れてより、歌人の部に思はれたるこそ幸なれ。朧月夜の風しづまりて遠く聞ゆるはよし。古池に飛んで翁の目さましたれば。此物の事さらに勝りがたし。

蟬はたゞ五月晴に聞そめたる程がよきぞ。や丶日ざかりに啼さかる比は人の汗しぼる心地す。されば初蝶さも初蛙さもいふことを聞かず、此物ばかり初蟬さ思はる丶こそ大きなる手がらなれ。やがて死ぬけしきは見へずさ此もの丶上は翁の一句に盡たりさいふべし。

ほたるはたぐふべきものなく景物の最上なるべし。水に飛びかひ草にすだく五月の闇は只この物の爲にやさ迄ぞ覺ゆる。然るに貧の學者にさられて油火の代にせられたるは此もの丶本意にはあらざるべし。歌に螢火さ讀ませざるはことの外の不自由ぞ、俳諧にはその眞似すべからず。

日ぐらしは多きもやかましからず、暑さは晝の梢に過て夕は草に露をく比ならむ。つく〳〵ほうしさいふ蟬はつくし戀しさもいふぞ、筑紫の人の旅に死して此物になりたりさ世の諺にいへりけり。哀は蜀魄の笠に叫ぶにもおさるべからず。

蜘蛛はたくみに網を結むでひそまつて物を害せむさす。待くれの歌によまれ、又は退隱の媒さもなりたれば、單に奸賊の心ありていさにくし。古代朝敵の始さして賴光をさへおびやかしたるいさおそろし。さはいへ廢宅の荒たる軒に蟬の羽などかけ捨たるはいさ丶かあはれそふ折もあらむ。か丶れば甲斐〳〵しく巣つくりてこそあれ、東海道にちりほひたる宿なしものをば蜘さはいかでいふやらむ。

芋虫は腹たつものにたさへ、毛虫ばむつかしき親仁の號さす背虫客むしは名のみして虫ならず。油むしさいふは虫にありてにくまれず、人にありてきらはる。

蠶の生涯は世の爲に終り、火さり虫はたが爲に身をこがすや蜉蝣ははかなきためしにひかれ。蓼喰ふ虫は物ずきの謗さなれり。さは俳諧するさのを俳諧せぬ人のかくいふ折もあるべし。

おなじ實の名によばれて。王むしはやさしくこがれ虫はいやし。

蟻は明くれにいそがしく世の營みに隙なき人には似たり。東西に聚散し餌を求てやます、いつか槐安の都をのがれて其身の安き事を得む。さるもたよりあしき力に穴をいさなみて、十丈の堤を崩すべからず。

蠅は歐陽氏に憎まれ、紙魚は長嘯子にあはれまる。

狗の齒に嚙る丶蚤はたま〳〵にして、猿の手にさぐらる丶虱は逃る丶事かたかるべし。

虱を千手觀音さ呼ぶに蚰蜒は梶原さいへり。さるは梶原が異名なりや、げに〳〵

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

が異名なりや、先後今は去りがたし。

蝸牛は只水に有べきもの、いかで草葉に遊ぶらん。家持ちたれども行先々を負ひあろくは水盤の安きにも似ず。

蚯、蚯蚓の足なくしてあろくべくば、蜈蚣、をさむしの數多きはいらぬことゝ。蟷螂の痩たるも斧を持たるほこりより其心いかつなり。人の上はも此たぐひはあるべし。

蟹のあゆみにたさふべきものこそなけれ、たゞ原、吉原を駕にのりて富士を詠めゆく人には似たり。

促織鈴虫くつは虫はその音の似たるを以て名に呼べり、松虫の其木にもよらでいかでかく名をつけたるならむ。毛生ひむくつけき虫にも同じ名有て松を枯し人にうとまる、一ト在所に二人の八兵衛ありて一人は後生を願ひ一人は殺生を事とするこれ松虫のたぐひなるべし。

きりぎりすのつゞりさせとは人のために夜寒を數へ、藻にすむ虫は我からと只身の上をなげくらんを、蓑虫の父よと呼ぶは守宮の妻を思ふには似ず。されども父とのみ戀ひてなどかは母を慕はざるらん。

蚊は惡むべき限ながら、さすが卯月の頂端居めづらき夕べ始めてほのかは聽きたらむ、又は長月の比ちからなくのこりたるは寂しき方もあり。蚊屋釣たる家のさま、蚊やり燒里の烟など且は風雅の道具ともなれり。藪蚊は殊にはげしきなかの七賢の夜咄にはいかに團の隙なかりけむ。

むかし銀に執心のこせし住持は蛇となりて錢箱をまさひ、花に愛着せし佐國は蝶となりて園に遊ぶ、そも俳諧に心とめし後の身いかなる虫にかなるらん、花にくるひ月にうかれて更行行燈の影をしたひ、なら茶の匂ひに音を啼くらむこそ哀なるべけれ。

理學

天氣と雲の關係

馨子

今日昨日は、一歳中の好時期となりたり。春花は梢に笑ひ、青柳は纖枝を垂て招きます、いかに無頓着の人でも、明日の日曜日には上野か向島へでもとか、或はあすか山か、小金井は、何樣だろらなぞと、思ひ立たるならん、然るに所謂花曇りの時節故、準備に先だちまづ第一に氣遣はるゝは天氣です、近頃は至極便利な天氣豫報もありますが、まだ外に何か天氣を豫知する、工夫もがなと、思賜ふ方々も少なからざらむ、由て今花に霞む雲を見て、天氣を豫め知る、法を少く陳べませう、雲は皆水氣の凝結してなりたるものですが、其高低と濃淡の異るによりて種々の名稱を附け、夜雲、晝雲、卷雲、卷層雲、積層雲、雨雲なぞと申します。

夜雲は名の如く、夜に至りて、地面に近き所に現はるゝものにて、山嶺大樹、高樓なぞは、此雲の上に、挺出することがあります、鷄鳴曉を報じ、太陽地平線を離るゝ頃には、大抵此雲は消失てしまいます。且此雲は夏の夜多く現はれます。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

夜雲が旭日の昇るに從ひ、消るときは、晴天なれども、高所に止り散ぜざるときは、午後に至りて雨が降ります。

晝雲は日出塊狀を呈して現はれ、冷氣に逢へば、益々增大し、或は山の如く、或は峰の如き有樣となり、屢々大陽を蔽ひます、色は雲の濃淡或は受る所の、光線の工合に從ひ、白色又は淡赤色に見えます。富士や筑波の山腹に、たなびく白雲も矢張此雲です。此雲は夜雲と反對にて、夜に入ると消散します、それ故に斯く名づけたものと思はれます。

此雲が、圓塊をいくつも重ねたる如き、狀を現はしますとき、は晴天の徵しにて、其端々亂るゝか、或は夜に入も、猶消失せざる時は雨が降ます。又此雲が朝現はれ、夕方に消るは、好天氣なれども、雲の端が卷き上る樣に見るは、風の吹前兆です。

卷雲は秋の初め、特に多く現るゝ雲にて、天中に高く懸り、其形狀千變万化限がありませむ、上天一面に、魚鱗を並べたる如く、或は小魚が群を爲て、寄せ來る如く、或は更紗形の如き斑紋を現すものは、等しく此雲です、此雲は晴天にても出る雲なる故に高きときは、いくら出ても氣遣ふとはありませむ、されど其量漸々增加して降り、卷層雲となり、更に降りて積層雲となるときは、最早安心がなりませむ、もう一段降れば變じて雨雲となります。

又炎暑の候に當りて、劇に積層雲が現はるゝときは、雷鳴の徵候にして、朝灰白色の雪現はるゝ時は、天氣なれども、赤色なれば雨あり。

其外暗夜、月の暈を帶るは、水氣大に凝結し月光之に映じて、現はるゝものにして、降雨、近きにある前兆です。

隨感

十日の大火

たゝた

十日の朝、火ありといふ聲、夢心地に聞ながら、なほ朝ゐの床はなれうくおもふ折しも、人の足音などしげく聞えて、いども〱おそろしなどいふ聲す、いでらば、いづくならんともかくてのみはと衾はねのけて起出てみれば、げにいつも朝日さし出るあたりの空に黒煙沖りて、神田のかたとぞおもはれける、かしこにはしれる人あまた有、其家々いかに、人出すべきにもしかるべき人、此日さはりありてあらねば、たゞいかに

せん、いかならんといひ合ひて時を過しゝが母もすゝめ、おのれもいさゝかおもふ事ありて、しめり鐘聞ゆる頃、家を立出そこへと車にて行、道すがらの人々皆火におひし人又見てこし人などにあらぬはなしと見ゆる斗にて、あはれなる老婆の片手おもげに、蓋なき釜もちていさゝか包みたるものせおひしが目をすりあかめ、瘠せたる足出して草履だにはかでつかれはてたるやうにあゆむも有、片袖こがれたる夜具おひてはしる男、女共の手ぬぐひかぶり、手を引合しどけなくあゆみくるなどは心ざす方へ立退くなんめり九段にさしかゝればかの堤の上に黒山のごとく人立居て其あたりを見るも有、行まゝに人いよ／＼しげうなりて車にて行がいとも／＼あやふし、あなあやふし、車とくひくな、人にけがさすまじきぞ、やけしあといとせめて見たしとにはあらず、人少なき所ゑりて行といへど車夫聞入れずして、なほゆきに行て小川町へさしかかりこゝより焼出ぬといふ所へいたりぬこゝはいつも書肆多く父去頃かぞへ給ひしに廿八軒ありとのたまひき其中の中西屋賛成堂などのあたりは、くろう焼けたる本いまだ形を失なはぬも有、吹すさぶ風のまに／＼片々まひあがりて、人のおもてをうつさながらくろ雪かともみゆ、少し大きやかなるを手にとりしに活字のあと全くも消ず、何やらの法律書ならんとおもはるゝが、いさゝかよめしもありき、いくらの本を焼きしならんとをしき心限りなし、しれりし人の家あまた焼うせし中にも大きかりしがあとだになく、池のあとそこともしられず成しぞいとも／＼口をしかりける、鎌倉河岸へ出ればかねてかくとは思ひし事ながら、パノラマも錦輝館そこともわかず成はてゝ、はてなき蒼海原の如くみゆる中に焼残りたる庫のしろう立るは沖に帆はしる船にも似たりとやおもふことなくてみる人はいふめりかし、水道蓋あけたる所々人々のあまたつどひしは、火の爲に水の湯と成て煙の立を見しゐなりきとあとにてしりき、家に歸りて焼出されし人共の咄しを聞しに、夜中頃何となう騒がしきやうなるに、ふと起きて天戸明けし時はちかき沿集館に火のまはりし時成けり、いかにせましともおもひさだまらず、おどろきにおどろきて見てをりしに、あやしかりしは火勢いよ／＼加はり、あれにあるゝ風の下にのみ焔ふきつくる音、家の棟木などの倒るゝやうなる音の外人の足音の聞ゆるのみにていとものすごく人聲も聞

えざりしは、あまりにも常ならぬ風のさまに人々の一心になれりし故ありけんとかたりき、又あるとし若き女の櫻の枝持て、花見歸りとおぼしきが、この燒失し所通りしに、車の中へ石うちつくるものあまたありしが、人の心の事にあひて妬み僻む事おそろしとかたりし人あり、兎にも角にも、わがもの心しりてよりのめづらしき大火なれば母君のゆけとのたまひしもうべなりけり、人の世のはかなき事ども、ことに念ひにしみしやうにて。

○武

山月子

祖父の說なりとて、父上の語り給へりし言に、

武は無形なり、擊つに擊たれず、切るに切られぬものなり……勇者は其手を刀に觸れずして能く敵を服す云々。

我は思ふ、彼の血氣粗暴の輩、他を切らんとして赴き、他が自若をして動ぜざる風采に氣を呑まれ、膽を挫がれて、何をもなすと能はざりしといふが如きは、豈他が擊つに擊たれず切るに切られずてふ武と一なりしが故にあらずや、切言すれば活きたる武なるが故にあらずや、今の武を習ふ者、若し藝のみに止まらば、何の効かあるべき。

批評

平野次郎

透谷

春日局より以來櫻癡居士は純乎たる梨園場裡の作家とあれり。其詞句の巧麗なるは政論家たりし櫻癡居士に勝るも劣るところなし。居士は戲曲家なり、是より大に氣焔を吐かんとする戲曲家なり、われは居士の敏腕老ひて益盛なるを喜ぶ。

戲曲家としての居士を詳評する事は後日を期しつ、われは平野次郎を通讀し去りたる跡にわが腦裡に浮び出たる所感を記して聊か居士の戲曲家としての技倆を窺ひ見む。幕府衰亡論を讀みし時われは居士が德川氏の時代を知悉し、深く其心髓に貫くを認めぬ。而してわが春日局に接せし時の感も之れに同じかりしなり。春日の忠烈なりし事を始めとして曲中に入り來る人物悉く其時代を被りて現れ個々能く活動せり、殿中の禮法風儀さては會話の細微に至るまで、殘るところなく時代を眼目として作られたる跡蔽ふ可からず。今や平野次郎を得て更に居士が時代を讀む事の深きに感じぬ。ひそかに思ふ居士は戲曲家といふ上衣を着たる歷史家にはあらずやと。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

平野次郎は居士の作中春日局と伯仲する者なる可し。春日が貴女儕に鍾愛せられ平野が書生輩に珍重せらる可きは至當の理なり。戯園に長く關係を有する居士の事とて、用意周到場に臨まずして場に在るの心地す。

然れども われは卒かに居士に桂冠を奉ぜんとする者にあらず。詳確に時代を寫す事は戯曲家として左までの要件にあらず。人物の事業と傳記を細微に叙し去る事も亦た戯曲家の職にはあらで傳記家をこそ頼むべきなれ。然れども此作は元と優人川上の考案に基いて脚色を加へたる者の由なれば深く居士を責むる事能はず。

居士の作を讀みたる人は能く知らむ、居士が大なる想像を揮へざる事を。寧ろ實際を離れんより 理想を退けんとするを。人間の運命を窮めんよりは事實に關する人間の一片面を寫すに力を籠むるを。事を主として性質を次にするを。故に居士の作には大なる煩悶あらず、大なる悲苦あらず、大なる理想を含まず、大なる不調子を書かず。平野次郎ある前に尊王攘夷あり、而して後に忠勇漢を現出す、前篇恰も尊王攘夷の歷史を叙するが如し。

蓋し居士の地位は今日の所謂改良戯曲家にはあらず、沙翁崇拜には關係なき自然的進歩の作家ならむ。又た時代物作家としては時代御構ひなしの古人を排して堅く自ら樹立する所ありと覺へたり。戯曲としての幽妙なる味ひは遂に居士に望む可からざるか否やは未だ卒かに言ふ可からず。余は今東奥に羇客となり加ふるに病に犯されて寢床にあり。楠家に關する居士の新作ありと聞ぬるも未だ之を得る能はず、病愈へ京に歸るの日更に新作に對して管見を陳ぶるの榮を得ん事を樂しむなり。

後の月影

透谷

普ねく當世の大豪を網羅したる義捐小説若し一々に精讀せば一々に獨得の妙味ありて近頃になき好刊本となるべし。然れども徘優の技倆を、手振足取の細技に徹して批判する劇評家の爲す所を學びて、作者の詩骨を吟味するは余の爲すに忍びざるところなり。

義捐小説といふ憂ひを帶びたる廣告の下に茶番に似たるものあり、さゝきげんに髣髴たる者あり、正太夫の苦情も穴がち無

理なりとは思はれず。中にも莊重ありと見ゆる端物なきにあらず、唯だ何となく發起人のそれがしの平素の氣風が全篇に貫通するが如きを奈何せむ。むしろ地震講にても組織して毎回斯る端物を集めては如何。

然れども露伴子が風流と極好とを釋したる。逍遙子が「梅川」を評し、梅川を以て情を主とする者とし、小春は義理にからまれたる者との差別を明らかにせられたる如き。巖本氏が鴫立澤に於て西行法師を談ずる一篇の如き。是等の諸作に對して誰れか隨喜の涙を零さゞる者のある可き。

特に逍遙子が梅川と小春とを對照して心理より生理に進み兩美人の相貌までに蹈入りしは、我が批評の道の皮切にてあるべし。天網島が戯曲的分量を多く含み、冥土の飛脚が叙情の分量に富み、一は圓成し一は凸起する點には余も聊か思ひ至りし事あれども、今此文を得て讀下再三大に逍遙子の評に得る所あり。沙翁釋解の餘力巢林子に及ぶ事斯の如し余は竊に戯曲の趨勢漸く進みたるを喜ぶあり。

寄書

日本と一大勢力

菱東洲生

此頃神戸に於て爲せる演説の大意なり、聊か世人を警醒したき志を以て貴社に寄す、餘白に掲載し玉はゞ幸甚、

天下何れの國か轉覆なからん、何れの國か外國の征服を受けしとなからん、或は至尊の皇帝を縛して斷頭臺に弑し、或は優にやさしき妃君を捕へて、鐵牢に投下、或は幾万無辜の生靈を殺したるが如き、各國の史乘稀なることにあらず、然るに日本は萬世一系の帝祚を踐み玉へる皇帝を戴き、未だ曾て一ト度も外國の征服を蒙りしとなく、又比較的に極慘の流血もなし、是等は實に日本の世界各國に秀絶する所以にして、光榮之に過ぐるものなし。此の如きの日本、今後如何に成行くべきや、千秋萬古泰然として動かざる富士山と共に、東海に榮ふべきや、世界列國との競爭塲裡に於て、果して勝を全ふすべきや。

之を政治家に問ふて未だ確答を得ず、之を學者に問ふて未だ確答を得ず、去て預言者に問はんか、預言者は何處にも見へず、先づ今日の日本は押しなべて、サイベリヤ鐵道の竣功を心配し、東洋問題を氣使の人々にて充滿し居るが如し、余は政治家にあらず、學者にあらず、預言者にあらず日本の成行は如何なるべきやは知る者にあらず、然れども確信する所あり、故に之を披露して同感の士を得んとを欲するなり。

多分六七年前の事ならん。下總國に深く道を修むるとを好める娘あり、家は一村の豪家なりしが、一夜更闌けし頃、數人の强盜氷を欺く白刃を提て此家に入る、之を知りし家人皆聲を呑んで唯だ衾中に戰慄す、少女徐ろに起きて坐敷に靜坐す、端然優然として一點の動色なし、賊等之を見て、進まんとして足進まず、伸ばさんとして手伸びず、自ら如何んともする能はず、遂に氣挫け、勢去り、平身低頭して、少女の前に行き、深く己等の罪を悔ひ、單へに其赦を求め、且つ如何にして數人の强盜に對して、一點の動色なきを得るかの秘訣を問ふ、少女靜かに道を說きて之を去らしめしと云ふ。

天下最も恐るべき人は至誠の人なり、最も强き人は正義の人なり。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

ヘンリー、ワード、ビーチャー曰く正確なる主義を以て、道德の基礎の上に立つ人は、假令全世界が彼に對するも、恐るゝとなし、而して彼は全世界よりも勝りて强しと。

露西亞、英國、獨乙、佛國、墺國、合衆國、支那等は日本に對して勿論彼少女の家を犯せし强盗の如き、無道殘暴の國々にあらず、然れども常に警醒せざるべからず、彼我の力量を比較すれば、日本は大抵是等に劣る、金力と云ひ、武力と云ひ、學問と云ひ、數歩を讓らざるべからず（尤も學問の如きは支那に優る數等なれども）只一歩も彼等に讓らざるとを得るは、大和民族の特色なる愛國心ならんか。

然れども、記臆せよ、眞正の愛國心は、正義に基づかざる可からざるとを、正義の向ふ所天下何物か敵せん、何物をか恐れん、彼少女は此正義に據れり、故に殘暴なる賊も自ら進むと能はざりき、力も、富も、權も、才も、惡魔も正義の前には到底跪づかざるべからず。

米國が英國に反して獨立の戰争を布告するや、米國の力も、金も、機械も、軍艦も、兵備も英國に比すべきものにあらざりき、然れども、米國は正義の基礎に立脚せり、此故に英國は遂に其前に屈せり。

エマルソン曰く、何人が戰ひ、何人が倒るゝも、正義は長へに勝ちて、變るとなし、正義の味方に戰ふ者は假令十度び、百も度び屠らるゝとも、神之に勝利の冠冕を與へん、と是れ一個人に眞理なる如く、國民にも眞理なり。

此の如き一國の正義は、健全なる道德より發せざるべからず、一國の健全なる道德は、健全なる宗教より出でざるべからず。

東西の歷史を繙くに、國民の道德は、必ず其國の宗教と盛衰を同ふするを見る、是れ甚だ覩易きの道理なり、葡萄はアザミより出でず、人は馬より生れざればなり。

淫猥なるバール神は跪きしカナン族バビロン人の道德は到底淸潔なる能はざりし、國民は遂に墮落滅亡せり。

犬、猫、牛等を拜せし埃及人は、遂に彼等の精神を卑陋ならしめたり、史家は此動物崇拜を以て、埃及文明の腐敗せる大原因となせり。

日本は如何、此の動物崇拜もあり、淫猥なる偶像もあるなり、余曾て東京に在て、神田明神の祭典を見たり、恐らくは日本國中大祭典の一ならん、其仕懸の大なると、其雜沓することと、實に驚くに堪へたり、神田明神は何なりや、日本帝國の首都なる東京に於て、此の如き偶像の大祭典あるは果して何等の事ぞ、日本人は昔年の習慣なれば、殆んど誰も此の如き祭典が日本の名譽に大關係ありとは思はず、然れども、歐洲或は米國の新聞記者は之を以て、偶像教國なる日本の現象として、世界に披露するなり、此の如き偶像教及動物崇拜は、實に日本の無教育社會を主配するなり、日本社會の大部分を占むる人民にして此の如くんば、如何にして健全なる國の道德を望むべけんや、如何にして純粹なる國民の愛國心を望むべけんや。

佛教は既に、根底より腐敗して、之を救濟するの力を失へり、儒教は社會の自然陶汰法に陶汰せられて、最早活氣を消亡せり、社會の長物となれり、余が此に諸君に紹介せんとする大勢力あり、假りに、歐米の文明史上より此一勢力を取去れ、何を以て文明史の骨となし、肉となさん、此れ即ち基督教なり、千八百九十年前ユダヤの寒村ナザレに生長せしキリストなり。

英國の大文學者カーライル呼んで曰く、天下何物か、彼エルサレム樓上に集まりしキリスト信者の團躰ほど、弱く見ゆるものあらんや、誰か知らん是れ後世全天下の最大勢力と成らんとは、蓋し眞理は最後の戰勝者なりと。

當時のキリスト信者は實に僅々百名內外なりしならん、余昨冬或る外國新聞にリチヤードと云ふ人の、キリスト信者の統計を見しに、紀元三百年には五百万人なりしが、今は四億五千万人なり、世界人類の殆んど五分の四は、今基督教の主配に屬せりと云々。

キリスト曾て使徒等に向て告て曰く、吾れ火を地に投入れん爲めに來れり、我何をか望む、既に此火の燃へたらんことなりと、然り此火初めてパレステンに燃へ上り、蔓延又蔓延、歐洲を燒き、亞米利加を燒き、烟焰尙ほ西方の天を蔽ふ、或は万國公法に、或は歐米各國の法律に、或は自由貿易に、或は非奴隸運動に、或は監獄改良に、婦人の位地に、貧民救濟法に、教育の事業に、矯風の事業に與づかりて皆大動力を與へたり、今後益々勢力を加へんとす。

今や東方亞細亞を燒かんとして來れり、日本に於ても、火勢年と共に愈々熾んならんとす、余は切に、諸君が早く、此火の大勢力を認められんとを望むなり、否な、諸君の心中に燃ゆるに至らんとを欲するなり、此火一旦我日本人民の心中に燃へんか、正義の精神愈々熾んになり、一國の元氣益々振作するに至らん、日本の人民既に正義を固く執るの國民たらんか、天下如何なる國か敵せん、如何なる國をか恐れん、正に俯仰天地に愧ちず、而して我日の本の光遠へに輝かん。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

孤兒之友

松本婦人會

淡く浮れ櫻花に狂せる人よ、汝が舞踏の木の蔭は、之れ去年人世の迷路に陷ち、吹雪に卷てあはくも消へ失たるにあらずや、死魔の手は、汝の肩にあり。愛の子の手はあにぞ、たれか記臆せん。飛鳥山の北麓に孤女學院ある事を、西台南端に曉星園ある事を。余は切に感謝す、吾人が思はざる處に、同情の君ある事を、輕兒櫻花に浮るゝ時、無告の孤兒貧兒の爲に、同志相謀り、之が尠からざる勞を執られ給ふは、松本婦人會なりとす、同會は左の書を寄せ、友に其配付を托されき

拜啓然は今般妾等同志相謀り當地に於て慈善會相催し其收入金の內別紙爲換劵の通り金廿圓也孤兒女保育の一助に供せんと存じ貴社に御送付申上候間乍御手數右の內金拾圓は大須賀君の孤女學院に殘り金拾圓は本鄉君の曉星園へ御配付被下候樣致度此段御依賴申上候也

明治廿五年四月十四日　長野縣東筑摩郡松本町松本婦人會

東京女學雜誌社孤兒の友御中

杉山某女子樣に答ふ

御尋ねの、孤女學院設立の趣意及び大須賀君の决心と信念は、女學雜誌第三百〇一號に告白せり、同院は本月九日北豐島郡王子瀧の川村未定番地の新築へ移轉されたり、又同院設立前より一生を献げて女子敎育に熱心なる志方之善君は、大須賀君を裨助さる、目下同院に養る孤女廿三名の內震災の爲に驅傷したる患者の分娩して、漸く十五日を經たる者もあり、之が保姆に當らる女子の献身者未だ同院の爲めに起らず、然し敎育の點に至ては、大須賀君自ら當り殆ど遺憾なし、又同院の新築は敢て壯麗ならざるも南面十四間餘にわたり、全く同院の爲に造りたるものなれば衛生上、及び便宜の點は余が知る孤兒院中に於て首さす、孤女の學力は未だ假名字を知らざれば夫を敎ゆる人の困難思ふべし、目今同院に世話する人男子二人女三人なり、以上は御尋の點に於て余が去る十八日迄に見聞せし處なり、答ふる處誤謬あらば同者及び孤女學院の爲に謹て謝す

箴言に曰　飽ける者は蜜も踐つく、されど飢たる者には苦き物さへもすべて甘し

●孤兒の友取次義捐金寄附物品第二回報告

金百拾二圓二拾二錢	前回寄附金合計	各孤兒院へ
金二拾錢	東京無名氏	孤女學院へ寄附
金五錢	某小學校生徒	同
金拾圓	松本婦人會	同
金拾圓	同	曉星園へ寄附
金三錢	某小學校生徒	孤女學院へ寄附
金五圓	橫濱無名氏	同
金五圓	同	博愛社へ寄附

合計金百四拾貳圓五拾錢

取合拾四品	前回の合計	各孤兒院へ寄附
綴襟二種	孤兒の友	博愛社へ寄附
女學、敎育學二冊	同	仙台孤兒園へ寄附
椅子百脚(三澤君を經て)	女子學院	孤女學院へ寄附
稻作改良法一冊	孤兒の友	博愛社へ寄附
米作改良法一冊	同	同
農業講義錄一冊	同	同
同一冊	同	北海孤兒院へ寄附

合計百二拾二品

紙面の都合に由り孤兒の友第二回會計報告は次回に掲載すべし

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

女報

可愛子編

●行啓　皇太后、皇后兩陛下には、曩に仰出されし如く去る十五日芝公園內能樂堂へ行啓あらせられたり。

●行啓　皇后陛下には來廿五日午前九時卅分御出門女子高等師範學校へ行啓あらせらるゝ由。

●觀櫻の御會　來る廿三日濱離宮に於て觀櫻會御催に付、天皇、皇后兩陛下御一列、同日午後二時三十分御出門、同離宮へ臨御あらせらるゝ由、尤も當日雨天なれば御止の筈なり。

●女官の摘草　去る十五日午前は少しく風立ちたれども、朗かなる天氣なりしをもて緋袴或は洋服の裙を引きたる女官の方々、侍女を從へ舊本丸に摘草の遊ありたりと。

●精華女學校　今般府下池の端に設立せし同女學校は、我國固有の女德を涵養することを主とし、良妻たり賢母たらしめんことを期するものなりとぞ、學科は本科豫科專修科の三部に分ち、本科は修身歷史國文漢文數學理科家政習字作文裁縫女禮の十一科、豫科は修身歷史地理數學習字作文裁縫繪畫の八科、專修科は國文歌學裁縫習字女禮(附茶湯活花)等の數科あり。

●青山英和女學校　にては、例年の通り去る十七日の夕、復活日の集りを開かれたりと。

●明治女學校　にては春季開業を了へて、去る二十一日より授業を始めたり。

●保育園の慈善保育　麴町區一番町十二番地なる大日本婦人衞生會附屬保育園にては、今回の神田大火に罹りし爲め困窮に陷り自宅にて我小兒を育て兼ぬるものを引取り、無謝儀にて保育の勞を取るといふ。

●植村正久氏第二孃薰子永眠　同孃は病重りて、去る十一日、五年七ヶ月を一期として、とこしへの國にかへられたり、十三日午後一番町會堂にて葬式執行、谷中の墓地に葬られぬ、吾人は植村氏の一家に同情を養すること切なり。

●少女を傷くる兇徒に於る一說　昨今まで引きつゞきて其取沙汰の絕間なき、少女の顏面を傷くる兇徒につきて、世人は之を一種の色情狂なるべしとの考定もありしが頃ろ或る人の一說を聽くに此は巾着切の社會にて、賭事の爲めに斯る惡戲をなすに相違なし、其兇徒の少年輩の者多きと、其の使用する利器の指間に挿入すると、其の擧止の神速にして神出鬼沒なるを以て見るも、巾着切社會の所爲なるべし云々と、是れ亦或は然らん。(國會)。

●風俗上の警戒　園田警視總監は、此程各警察署長へ風俗取締上に就て、嚴重に訓達する所ありと聞けり。

●廢娼建議案の前途　近縣の廢娼熱心家は廢娼建議案を十一月の通常會に提出し、畢生の力を盡し運動を議院の內外に試むる決心にて、廢娼同盟會の重なる人々は目下各地に遊說贊成者募集中なりと云ふ。

●茨城婦人會　同會の會長には、過日の臨時會にて、石井知事夫人あつ子氏撰擧せられたり、目下會員數十名あり、事務所は水戶市仲町二十四番地にあり、技藝部を設け、部長の任は、岩瀨せい子氏擔任せらる、會員、若くは會員外の者といへども專ら技藝を傳習するといふ。

●名古屋美以教會の婦人慈善會　は昨今再興して、運動活潑なりといふ。

●祭典　洛西太秦廣隆寺內に在る吳織漢織の祠は、兩女吳國より渡來の際、始めて彼の地にて織物を教授したるを以て、玆に之を祀りしより、毎年三月十一日、木島神社祭事の節神輿を此祠の前に据ゑ、祭典ありしも、明治初年來中絕しありしを、本年西陣機業者と生糸商の發起にて之を再興し、祭典を執行し餘興として廣隆寺の什寶聖德太子の御裝束を始め五十點を陳列し參詣者に縱覽せしめたりといふ。

●故梅田源次郞氏の娘　目下大坂の角座にて其事蹟を演じ居る、梅田源次郞氏の女某は、奈良春日神社宮司水谷川氏の家扶高橋某方に嫁し居る處、今度角座にて亡父及び母芳江が洛東一條寺村の觀音堂にて、貧苦に迫り貰乳にて我身を養育せし樣を演ずる由を聞き、此程大坂へ赴むき角座を見物し懷舊の淚に袖を浸したりと云ふ、因に記す京都なる梅田家は、右某女の子を養子として家名を相續せしめあるよし。

●上京高等小學校卒業の女生　京都上京高等小學校にては、去る九日第五回卒業證書授與式を擧行せり、本學年の卒業生は十四名なりと。

●岐阜縣の藝妓取締　去る十二日岐阜縣にては、縣令第二十五號を以て、藝妓取締規則中「遊廓所在地に於て營業する藝妓は其廓內に居住すべし」との改正條項を設け、來る六月三十日限り各其區域內に移ることゝなれりと。

●町藝妓の訴願却下　大阪四區幷に接續町村に在る町藝妓二百餘人は、夫の藝妓取締に係る本年一月府令第三號の施行延期のことを府知事に出願し、一方には訴願法に依りて內務大臣に訴願し、府知事へ出願せし分は嚮に聞屆け難き旨の指令ありたるが、內務大臣への訴願も訴願すべき性質のものにあらずと云ふの趣意にて却下され、去る十二日府廳に到達したるに因り、十三日其訴願人を警察部へ喚出し右の趣を傳達して却下したり、

●娼妓の仕入盛なり　古志三島地方へは、此頃續々娼妓の仕入者入込み、普通よりは二三割方も高く買ひ、且容姿の醜美に關せざるより之に應ずるもの續々あり、此等の娘は皆な北海道へ輸出するものなりといふ、嘆すべき哉。(東北日報)。

●良看護婦　岩手縣紫波郡飯岡村四戶永壽氏の次女暢子は性溫和優美、田舍に稀

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

なる淑女なるが、六七年以前より速記學を研究せんものと居村より一里余もある盛岡の某方に通學し居りしが、其の后明治二十年父の勸めにより單身石の巻に赴き、米國宣教師ジョンス師に就て語學を學び、翌年師に隨ふて上京し、女子の職業を修めんと決し、東京芝區の慈惠醫院教育所へ受験の上入所して寄宿生となり、三年一日の如く勉學に従事せしかば、忽ち女室長に任ぜられ、次で全科卒業し該醫院奉職の身となれり、暢子勤學中非常に節儉を旨とし、餘せしものを父母に贈りて父母を慰めるなど感ずべきと少からず、本年二月頃横濱の豪商磯野某氏の令孃病に罹り、該醫院の看護を乞ふ、暢子即ち應じて看護すると丁寧を盡せし故、看護の効忽ちあらはれて病者も癒え、父母の喜び一方ならず、謝するに二百金を以てせしを、固く辭し、妾は只職務を盡したるのみなれば斯る大金を請取る次第なしとて、再三之を謝せしも、磯野家にては强て乞ふて止まざるにぞ、暢子は、然らば妾に贈るの資を以て更に貧民救助のため吾醫院に寄附ありたし、是れ妾が戴くと同一なりと云ひければ、磯野家にては大に感じ、二百圓に三拾圓を加へて更に該院に寄附したりと云ふ。

●此母にして此孝女あり　孟母三遷の教へあり、所謂氏より育ちにて、天性怜悧きのみならず善良なる母の教訓に依て斯る孝女を生ぜしものか、伯州米子岩倉町に水下仙太郎と云へるあり、當時郡内にも稀なる漢學者なれど、商業には少しく昧き所ろあり、之がため家富むと云ふにあらざるより、妻は家計を助けんと熱心實業に従事して、日に男子に劣らざる程の金錢を得、勤儉貯蓄を旨となし、長女チカ子（十一年）の教訓を年來怠る所ろなかりしが、其効驗著るしく、チカ子は昨年小學を卒業なし、暇ある毎に茶の湯活花の道に心懸け、人にも稱せらるゝ程上達なしたるが、小學卒業の後は聊かなりとも家計を助けんと、坂口製糸場の工女となり、風雨劇しき時といへども、唯の一日も休みなく、精勵勤務なしければ、工女中にも優等の位地に立ち、七錢餘の日給を得て、之を悉く父母に渡し、吾手につくる事とては少しもなく、稚ながらも孝行を盡して餘念なきと云ふは最とも賞すべき事にこそ。（松江日報）。

●琉球婦人の教育　この島は特に内地よりも婦人教育には不熱心にして、家庭教育とても別に見るべきものなし、全島の婦人悉皆目一丁字なしと云ふも決して酷評にあらず、然るに槪して婦人が家政をなし、且商業に従事し、凡ての業務をとり、男子は多く悠々として暮す風なるが、扨婦人は文字なく能くも出來たる事かなと疑ふものもあらむか、なれども婦人は例の結繩を以て其用に充てけるとなり、婦人の教育に就ては當局者の最も骨を折りたる所にして、女子普通教育現今の有様は實に左の如し。

學齡兒童總計七万五千八百八十一名にして、中に女子は三万七千九十八名なり、而して現在普通教育を受くるもの（廿三年度統計）男子一万七百五十八名に對して、女子僅かに二千二十四名なり、然し前年に對照すれば女子は四百六十五名を増したりとなむ、以て現今婦人の教育を想像すべし、然しかく迄なしたる當局者の効は決して沒すべからず。（中央新聞）。

●三重縣通信　●募集　三重紡績會社にては目下十三才より三十才までの工女を、四日市製紙會社にては十三才より四十才までの工女を、奄藝郡「マチノ」製絲場にては十三才より三十五才までの工女を、おの〳〵百名づゝ募集中。

●四日市婦人會　は去る十日例會を四日市高等小學校上に開きぬ。

●上野監獄署　にては目下女囚僅かに一名。

●松坂尋常小學校　にては學年試驗執行せり、應試の女生三百名。

●惡所　は至て寂寥、殆んど人無きが如し、數百の妖鬼皆菜色を呈せり、昨年來より廢業者二軒ありたり、惡所の衰ふるとは誠に喜ぶべきなり。

●福島縣通信　●廢娼運動　全運動は昨年將に功を奏せんとして憾を遺せしを以て、本年は愈活潑なる運動をなし惜に成功せんとて、過日縣下白河町に福島縣福音同盟會を發會するの日其方針を決定し、即來る十月よりは同盟地に於て公然演說會、若くは有志訪問等にて運動し、縣會開會前一週日以前に各地より委員上福し、東京よりは辨士を廢娼會に仰ぎ演說會を開き、各委員は分擔して縣會議員の宿所を叩き、寢食を禁ずるも彼等が廢娼門に降伏する迄決戰せんと意氣込み居れり、該同盟地は白河、須賀川、郡山、本宮、福島、伊達平、中村、若松等にして、縣下貸座敷の在る所なり、十月迄は驀然運動をなす由。

●岩手縣盛岡通信　●尋常師範學校女訓導　東京女子師範學校訓導安川てつ子は、岩手縣尋常師範學校訓導に任ぜられ、月俸貳拾五圓支給せらる。

●多田綱宏氏　理學士なる同氏は。先頃尋常中學校及尋常師範學校高等女學校の教員免許狀を、文部省より下附なりたり。

●宮崎縣通信　●去る十一日（仙臺市）東二番町小學校に於て同校高等科卒業生の證書授與式を行ふ、總數卒業生二十七名にして、内十二名は女子。

●基督教の婦女　市内に在る一致、組合、美以、浸禮四教會の婦女子は、去る十一日午前九時より二番町教會に於て聯合祈會を開き、仝日午後七時より辨士に依賴して演說會を開き、又十六日には近き山に於て懇親會をなしたり、十六日には女四方より集り、その數三百五十名以上。

●松操學校　にては十七十八兩日を以て、裁縫科卒業生の試驗を行へり。

●仙臺市孤兒園　は松田順平氏の創立せんとする者にして、同氏は目下岡山孤兒院へ赴かれたり、本園は當分の内假事務所を仙臺市東一番町五番地眞山亘氏方に設置せり、其概則左の如し。

第一、目的。無告の孤兒を集めて鞠養教導し、一個獨立の人たらしめ其天職を全うせしめんとを期す、

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

第二、入園者資格。滿五年以上拾貳年以下にして、無告の孤兒たるの保證あるものは男女を問はず入園を諾す、(但瘋癲白痴及私生の兒は此限に非ず)

第三、維持法。上帝の冥助を祈り下は滿天下有志家の義捐金品等を仰ぎ之を維持擴張して如何なる困難にも決して負債をなさず

第四、教育の方針。實業的教育を重んし、德智体の發達健全を計り、獨立自治の人たらしめんとを期す、

◎震災孤兒院へ寄贈　仙臺市肴町鎌田甫山翁の發起にて、風流慈善會を設け、其入金を大内源左衛門氏が愛岐震災孤兒廿一名を養育するの擧に寄贈せんとて、此程廿一名へ皮籠一個宛寄贈されしと云。

◎殊勝なる番頭　仙臺市米ヶ袋下町士族庄子利源太の長男利三郎、次男利吉の兩名が貧窮にして孝心の行狀なるを感じ、同市國分町旅店菊平方の帳場を勸め居る秋田縣雄勝郡湯澤町小川磐吉は、金一圓を惠送せり、此事一般の知る所となりて續々新聞社へ寄贈する者あるに至りたり。

◎小學教師中學教師となる　仙臺市木町通高等小學校訓導たりし諸井くま女史は、栃木縣尋常中學校女子部教員となられたり。

◎卒業式の祝歌　宮城縣尋常師範學校卒業式に於て、同校女子部舍監高山みつ女史祝詞(畧す)及び一首を朗讀せり、其歌に「朝な夕なめでしなでしこ時を得ておしへの庭に咲くぞ嬉しき」

◎熱心なる女丈夫　宮城縣岩沼町に佐藤そよ(三十三年)といふ婦人あり、同町醫師佐藤某に嫁す、性沈着にして能く夫に事ふ、一旦主の救を得るや哀情禁ずべからざるものあり、本年二月家を辭し仙台に來り、豐澤裁縫學校に入學し、日夜精勵怠らず、常に亂髮黑衣一意期する者あるが如し、蓋し卒業後貧女教育に從事して幾分の任務を果さんとするにありと、初め此行夫の諫むる所となるも女史哀訴措かず終に此擧に及ぶ、其信仰の健固なる彼の夫の祿を食み子弟の教養も家政の整理も能はざるの人をして愧死せしむ、然るに止る數月、事情獨立せざるを得ざるに至るも、女史更に屈せず、(此時諸友種々自活の道を談ずるも意を狂げず)自助の精神益盛に遂に身を降してインダストリアルホーム(東北學院設立に係る自助舍)に入り、學生の炊事を補護し、依然裁縫校に通學し、夜間は讀書習字等を學習し、大に期する所ありしが、此頃少しく病痾に罹り休學せらる、願くは主に在るの愛姉同女史の爲に祈り玉へ。

●歐洲中躰量最も重き婦人　はパトリヤに於て死去したり、此の婦人の躰量は五百パウンドなり。

●カルノー夫人　佛國大統領カルノー氏の夫人は、快活に優美にして頗る交際に熟練し、特に米國人を愛重せりと云ふ。

●婦女の投票權。佛國代議院に於ては、職工審理會員撰擧の投票權を婦女に與ふるの議案を可決したり、但し同會に於て婦女に被撰權を與ふるの發議は否决せられたり。

●ホーセツト夫人　の言によれば、英國及ウエルスに於ける婦人の地主は三万八千人にして、其の中二万人は之を小作人に貸せりと。

●ビクトリヤ女皇陛下　の治世間即今日に至る迄、大英國がなしたる戰爭の數は十五と。

●英國　農婦の數は二萬人なり。

●米國の分科大學　に於て修學せる女生徒の數は四萬人なり、而して米國が婦人の分科大學に入るを許したるは今より二十五年以前なり。

●米國の婦人同盟倶樂部　は百五十の倶樂部を代表せるものなり、其の中最も古きものはソロシス倶樂部なり。

●米國に於て婦人のために設けたる職業　凡そ四百種あり。

●米國に於ける婦人の麵包製造會社　シカゴに於ては、資金廿五万弗を有せる麵包製造會社あり、此の會社は婦人禁酒會員が組織せられたるものにして、唯だ善良なる物品を作るのみならず、一切の事婦人以て爲し遂げんとを目的としたる者なり。

●米國男女の數　千八百八十年の戸籍によれば、米國に於る男子の數は二千五百五十一万八千二百人、女子は二千四百六十三万六千九百三十三人なり。

●實際的婦人教育に就きての　ノルスクラフト孃の意見　去る二月第三月曜日にケンシントンモラントハウスにて開かれたる集會に於てノルスクラフト孃は婦女子が將來の方向に對して學校内の生活及現今の教育法を進歩せしむる事に付きての方法と云へる題にて下の如く辨ぜられぬ。即現今婦人の位置に關せり起り來る往々の變遷の中尤も普通に婦女に關係し若かも尤も大切なるものは即教育の一事なりとて其發達を妨げんとし且つ遠く將來之子孫の代を期して企つる迄の種々の事業に甚く反對する多くの人々に對してこは決して我等が直接に結果を得んが爲のみにあらで日に進んで愈々必要を增す所のことなりと又た當今の通僻は多くの能力を發して智識のみを練磨し此くして完全の婦人を養生せんとするにあり彼の試驗とか懸賞奬勵法及不勤勉を責むるなどの組織は教育上却て妨害なり蓋し教育の望はありのまゝに本性を開發するにありて他より新たに得るにあらざればなり。又完全の婦人を教育するの法なりとて種々了解し安き辨論を試み猶身躰の健康は凡ての事の礎にして次に道德上の發育に心がくる事を必要とし智育は如何に老練なる教師に依り教授さるゝの場合を得るとはそは更に其下に次ぐべきものなり婦女子は特に家政の諸務に付き綿密なる注意を要す此心は實に彼女が生涯を運轉する車輪の油にし忽がせになす可らざるの事なり其他諸禮義、巧手、人の爲に盡すなど云ふ意は凡て心尊き婦人の天然の性狀なりと此くしてノルスクラフト孃は婦人が此世界に於て價値ある勸めを爲し得るに適したる養生法を種々卑近なる事實に依りて辨じ且つ曰く現今多くの婦人は此くあらん事を欲する樣に成り

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

たる程多く其思想高まりぬ然るに其割合に實際行ひ得ざると云ふ第一の障碍は即其兩親の如何に之を切望すとも定まりたる小量の收入の内より如何とも爲し能はずして徒らに彼等の勞する事なりとて孃は兼て經濟學を研究したるより此場合に於ける所置に就き下の考案を呈出せられぬ即第一生活法を單一にし第二共働法の生活を學び第三此くして娘が入學中には勤めて無益に時を費さざる樣に彼の女が好みと及其特性に適ひたるの一事に特に意を用ひて學ばしむるにあり然して最後に婦人に關するあらゆる職業事業等及修業上の入費一人としての諸需要、又は永遠に得らるべきの收入等を計算して世の志望ある父母に示して女子新學校の名を以て此の設計を實施せんとすとは述べられけるとぞ。

●ジユールス、シモン氏の婚姻論　吾人々類相互の間に於て尤も主要且つ密接なる關係を有するものは婚姻なり而して其要旨たるや子孫の繁殖及び之が教育に外ならず。上帝は此大任を世の父及母たるべき者に自から責を分ちて授け玉ひぬ。父が任は主も外部に對するとにして即ち出來得る丈の力もて外部より家族に寄せ來る諸々の危害襲敵を防禦防安し諸般の必要を備へ又たは後來子孫が立身の際要する時替へて用ひ得べき物を豫備する等の事にして猶外部のみならず加ふるに内部諸般の事に於ても家族の者に斷行の決心に補助する等尤も其が務めなり。之に反し母たるもゝ務は主も内部のみにして第一家内の整理團欒に心を用ひ衣食を調へ婢僕を監督し家内の何人にても微恙あらば其患憂に第一に同情を表し日夜に其が看護を一任し而其子兒に關しては丁年に至る迄は一擧一動悉くに注意を與へ即幼にしては膝上に或は乳與へ或は歡ばしめ或は之に樂しき眠を與へ又は何如にして食すべきか或は如何に話し又は歩むべきやを敎ゆる等なり。是れ母の務の大方なるが世の母の實際行ふ所は之のみなりや其未だ言語の通ぜずに以前に於ては母が微笑の内に後年の希望思想及の諸般の敎を示し漸くにして言葉を交ゆるに至るや種々の必要義務及他愛の事などを聞せか又微かにても事理に通ずるに至るや神を知らしめんとて企續て義務及犧牲など云へる事を考へしむる等其宗敎上の事などは彼等が成長の後自からにして究め得る凡ての事よりも多くを此間に知らしむる等は世の多くの母が務むる所にあらずや實に母が小兒に對するや身心を盡して之に已が知る處を與へんとし從て起る處の愛の言葉は世の優等の辨者と唱へらるゝ所の人にも知らずくゝ優れるの雄辨たるべし然して此くも限りなきの苦慮もて得たる結果は恐らく英明高德の子たるべく故を以て其が靑年に達せる時彼が不拔の英才及びあらゆる智識を備へ居る事を知れる時彼が凡ての事に豐かにして不幸には安慰あり若も健康にして不足を感ずる事なき一言するに彼が得たる性格も是も母の敎への結果と云はずして何ぞや是即神が希望し玉へる吾人が生活とこそ云ふべきなれ。

品名	四月廿一日
白米（一円ニ付）	
一等米	九升九合
二等米	一〇一
三等米	一〇三
四等米	一〇六
五等米	一一二
正米（一円ニ付）	
越中米	一斗四升一合
越後米	一三八
美濃米	一三六
土浦米	一三五
行方米	一三六
雜穀（一円ニ付）	
本貫大麥	二斗九升〇合
上州小麥	一七八
竹林麥	一九五
梅澤大豆	一九五
青柳大豆	一九五
吟小豆	一六二
白胡麻	一一八
黒胡麻	一四〇
鹽（一円ニ付）	
赤穗	三、三〇俵
大鹽	三、四〇
本齋	五、五八
新齋	六、一五
醬油（一円ニ付）	樽分厘
最上	七三 / 七八
極上	八六 / 一〇八
上物	一三〇 / 一六〇
中物	一八〇 / 二〇〇
並物	二一〇 / 二七〇
味噌（一円ニ付）	
地製上白	六、八〇〇貫
同上赤	六、八〇〇
同紅赤	四、三〇〇

品名	四月廿一日
炭（一円ニ付）	
伊豆上	四、五〇俵
同中	五、五〇
同下	六、五〇
淺備上	三、八〇
丸備上	二、一〇
角上	二、七〇
土釜	八、五〇
切炭	八、〇〇
眞綿（一個ニ付）	
上々入金	一二、五〇円
上入金	一〇、七〇〇
並入金	一〇、二〇〇
松入金	八、八〇〇
竹入金	八、三〇〇
梅入金	七、五〇〇
絹糸（一円ニ付）	
本練花色	二七〇匁
同色物	二五〇
羽二重糸	二四〇
芥子糸	二九五
極天色物	二三五
色物太練	二五五
繰綿（一円ニ付）	
本坂上銘大入	七五五目
三別改銘大入	八一〇
三上文庫入	九〇五
同別改	八九〇
尾上文庫入	九一〇
遠州上銘同	九〇五
地綿同	九二〇
白木綿（一円ニ付）	
玉鶴	三、五〇反
綾鶴	三、八〇
日の出鶴	四、〇五
若柳	三、二二

品名	四月廿一日
製茶（一貫目ニ付）	
山城江州稀大頭	二、五五五円
同稀頭	三、一〇
同大頭	一、七七
同中頭	一、五五
同中茶	一、三〇
狹山稀大頭	二、〇〇
同稀頭	一、七五
同大頭	一、五〇
同中頭	一、四〇
同中茶	一、一〇
乾海苔（百枚ニ付）	
洲崎	七五錢
大森	七五
深川村	七五
大師河原	六〇
潮田	五〇
上總	五五
鰹節（十貫目ニ付）	
土佐夏	二八、五〇〇円
薩摩夏	三三、五〇〇
伊豆夏	二八、五〇〇
房總夏	三三、〇〇〇
駿遠夏	二六、〇〇〇
水油（一樽ニ付）	
地水	六、五〇〇円
胡麻	一〇、六〇〇
荏油	一〇、三〇〇
桐油	五、五〇〇
冬	七、五三三
坂水	七、五五五
石油（一箱ニ付）	
チヤスター	一、四九円
デボース	一、七一
ホーキ	一、五六
ロシヤ	一、六六

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

巖本善治編

吾黨之女子教育

小形二百十七ページ
定價郵便共金拾錢

「吾黨の女子教育」成る。巖本善治君の演述又は起草に係るものを編せしものにして、本校教育の精神、期圖、大率ね之に同じく、現今實施する所ろ亦之に異なることなければ、此書亦用ひて「吾校の女子教育」を代言するものと謂つべし。故に、君と計り、吾校之を版にして、世の同志に示すことゝす。

全篇十五章

明治女學校生徒に告ぐ……一
目下の女子教育法……一
何をか中正の旨義と云ふ……三十
女子教育に關する幾多の謬見……三十
女學及女子教育……五十四
母妻論……六十四
女學に反對する者の言論……八十四
日本女學讀本の編纂……九十二
女禮と躰操……百
上躰操……百
下女禮……百
女學校の裁縫科……百五
塾舍に三のはあり……百十二
武道の辨……百二十二
老母に代つて女學生へ苦情……百二十七
細君內助の辨……百五十
當今女子教育者の胸臆……百五十九
女學普及の經綸……百九十七
……二百〇七

發兌元　明治女學校

發賣元　女學雜誌社
東京麴町區下六番町六番地

正札引なし

新形　流行

○はをり紐　品々
○帯留類　品々
○時計紐　品々
○メリヤス　品々

右ノ外組糸一切御好ニ應ヲ精製
仕○御進物等ハ美麗ニ調進仕候

組糸老舗
日本橋區よし町
佐竹勝兵衛

○御用ノ節ハ御報知次第參館仕候

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

烈眞具

肖像入　洋裝美本
全
賣價　拾貳錢
郵税　貳錢

レッシングが歐洲の文學界宗教界に於て非常の功績ありしことは今多辨を要せざるなり、此書は氏が傳記及び其哲學上神學上の意見を纂めたるものなり。讀賣新聞本書を評するの言に滔々たる三文文學者にして若し之を一讀せは其見識の高大にして其理想の純潔なるに愧死するならん一般の讀者は雨前の風として少らく其渇を醫するに足らんと女學雜誌の評は前號にあり。文士宗教者たるもの必す讀むべきの書なり

發行所 東京築地二丁目二十二番地 一二三館
横濱地藏坂千五百五番地
賣捌所 女學雜誌社、醒社、大坂、神戸福音社、大坂梅原書店

早稻田文學第拾三號目次

釋義 万葉集　畠山健氏

講述 德川文學　關根正直氏

評註
丹波與作　饗庭篁村氏
マクベス　坪内逍遙氏

雜錄
美とは何ぞや　尾原亮太郎氏
支那の論理法　齋藤木氏
沒理想の由來　坪内逍遙氏

時文評論 陣頭に馬を立てゝ敵將軍に物申す●城南評論城主と逍遙子とのパーレー●罵の字●謠曲功用●早稻田文學會

附錄 八犬傳諸評答集　饗庭篁村氏

早稻田文學定價
一壹部金九錢、郵税二錢。一六部金五拾壹錢、仝拾二錢。一拾二部金九拾六錢、仝廿四錢。一廿四部金壹圓八拾錢、仝四拾八錢

黨報

第拾壹號は四月廿五日發行の處同日は恰も自由黨臨時大會の期日に當り隨て同會に於ける重要なる記事及報告す可き決議等可有之に付黨員及讀者諸君の便宜を計り廿五日の定期日を延期し廿八日發行と致し候間此段豫め廣告候也
一御注文の諸君は必らす前金(一部六錢、十二部六十六錢、廿四部一圓廿錢、郵税なし)相添御申越可被下候

東京市芝公園 自由黨黨報局

本黨大會決議等の報告は凡て「黨報」に掲載可致候に付此段黨員諸君に廣告す

自由黨事務所

新築の校舍へ移轉

東京市北豐島王子瀧の川村未定番地 孤女學院

產婆

本鄕區森川町一番地百七十號慈善看護婦會内同居 玉生くに

發行所 東京市麴町區下六番町六番地 女學雜誌社

編輯兼發行人 巖本善治
印刷人 堀口庄三

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

烈 眞 貝

洋裝美本 全 一冊 定價 拾貳錢 郵税 貳錢

レッシングが歐洲の文學界宗教界に於て非常の功績ありしことは今多辨を要せざるなり、此書は氏が傳記及び其哲學上神學上の意見を纂めたるものなり。讀賣新聞本書を評するの言に滔々たる三文々學者にして若し之を一讀せは其見識の高大にして其理想の純潔なるに愧死するならん一般の讀者は雨前の風さして少らく其渴を醫するに足らんと女學雜誌の評は前號にあり。文士宗教者たるもの必す讀むべきの書なり

發行所 東京築地二丁目二十二番地 横濱地藏坂千五百五番地 一二三館

賣捌所 女學雜誌社、醒社、大坂、神戸福音社、大坂梅原書店

早稻田文學第拾三號目次

釋義 万葉集 ⋯⋯ 呂山健氏

講述 徳川文學 ⋯⋯ 關根正直氏

評註 丹波與作 ⋯⋯ 饗庭篁村氏
マクベス ⋯⋯ 坪内逍遙氏

雜録 美とは何ぞや ⋯⋯ 尾原亮太郎氏
支那の論理法 ⋯⋯ 齋藤木氏
沒理想の由來 ⋯⋯ 坪内逍遙氏

時文評論 陣頭に馬を立てゝ敵將軍に物申す●城南評論城主と逍遙子とのパーレー●罵の字●謠曲功用●早稻田文學會

附録 八犬傳諸評答集 ⋯⋯ 饗庭篁村氏

早稻田文學定價
一壹部金九錢、郵税二錢。一六部金五拾壹錢、仝拾二錢。一拾二部金九拾六錢、仝廿四錢。一廿四部金壹圓八拾錢、仝四拾八錢

黨報

第拾壹號は四月廿五日發行の處同日は恰も**臨時大會**の期日に當り隨て同會に於ける重要なる記事及報告す可き決議等可有之に付黨員及讀者諸君の便宜を計り廿五日の定期日を延期し**廿八日發行**と致し候間此段豫め廣告候也

一御注文の諸君は必らす前金(一部六錢、十二部六十六錢、廿四部一圓廿錢、郵税なし)相添御申越可被下候

東京市芝公園 **自由黨黨報局**

本黨大會決議等の報告は凡て「黨報」に掲載可致候に付此段黨員諸君に廣告す

自由黨事務所

新築の校舍へ**移轉**

東京市北豐島王子瀧の川村未定番地 **孤女學院**

産婆

本郷區森川町一番地百七十號慈善看護婦會内同居 **玉生くに**

東京市麴町區下六番町六番地
發行所 **女學雜誌社**
編輯兼發行人 巖本善治
印刷人 堀口庄三

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY